

青谷付近の古代山陰道のルートについて

鳥取大学工学部	正会員	藤村	尚
鳥取大学工学部	正会員	林	昭富
鳥取県		横河	伸樹

1. はじめに

近年、鳥取県青谷町で青谷上寺地遺跡の発掘調査により弥生時代の多種多様な遺物が発見され、そこに大規模な集落があったと考えられている。また、大山町では妻木晩田遺跡が発見され、二つの集落の間にも交流があったと見られている。このように、各地の集落との間で盛んに交流が行われていたと思われる。奈良時代には、都と各諸国に置かれた国府は、東海道、東山道、北陸道、山陰道、山陽道、南海道、西海道の7本の『七道駅路』と呼ばれる幹線道路により結ばれていた。この中で、山陰道は、鳥取県青谷付近を通っていたのではないかとされている。しかし、どのようなルートで通っていたのかははっきりわかっていない。

そこで、本報告においては、地盤情報と史料などを用いて、古代山陰道のルートの推定を試みる。

2. 史料から読み取る古代山陰道のルート

古代の山陰道を考える上で重要な点の一つは、駅がどこに存在していたのかということである。駅とは、古代の社会において、各国から都への官道の要地に置かれた、馬や食料の補給、そして宿泊設備を備えた施設のことである。この駅のあった地点を結ぶことで古代の山陰道がどこを通っていたのかを推定することができる。因幡国には、最初、莫男駅・道保駅が置かれ、その後、山崎・佐尉・敷見・柏尾の四つの駅が追加して置かれた。古代の山陰道が青谷付近をどのようなルートで通っていたのかを推定するため、敷見駅と柏尾駅がどのようなルートによって結ばれていたのか考えてみる。敷見駅の比定地である鳥取市吉岡・松原から気多郡にいたるルートは、比較的短く、ルート沿いに、最高の正三位の神階を授位している天穂日命神社があるように、古代の社会においてその地域が有力な勢力を持っていたことがうかがえること、そして、気高町上光に官衙道路とみられる上光遺跡が見つかることから、鳥取市御熊を通り、気高町下光元字高尾口に至るルート、鳥取市辛川、雁津から気高町上光の塚手に至る馬場休峠経由のルートが考えられる。気多郡内のルートは上光から河内川を横切り、気高町二本木、土居、宿のいずれかを通り、山を越え、そのまま木梨、中園を通過して山をさらに越えるか、寺内から田仲を通過して山を避ける道を通り、会下辺りから、山を越えて日置の谷を通り、青谷町青谷付近にあったと考えられる柏尾駅に達していたものと思われる。

3. 地形から判読される直線性

古代の道路の特徴として、直線的に造成されている、幅広であることが挙げられる。また、駅路は、都と国府の緊急連絡路という性質上、とにかく長距離の直線路であった。そのため、航空写真を実体視することで見えてくる地形的性質から、古代山陰道の推定ができるはずである。

鳥取県鳥取市から鹿野町、青谷町にかけて、米軍によって撮影された航空写真を用いて、反射式実体鏡による実体視を行ったところ、想定したルートに図-1のように直線性が見られることがわかる。

航空写真から判読される直線性は、地形を3次元化することにより、客観的に確認することができる。そこで、鳥取県鹿野町下光元付近の3次元化を行い、航空写真を実体化することにより判読された直線性が実際にどのような物であるのかを図-3に示す。このような地形がそのほかの直線性が見られる場所でも見られるため、これらのルートを通っていた可能性が考えられる。

キーワード 古代山陰道 遺跡 地盤考古学 堆積環境

連絡先 〒680-8552 鳥取市湖山町南 4-101 鳥取大学工学部土木工学科 0857-31-5296

4. 青谷町付近の地質

青谷付近から採取されたボーリング試料から、古代山陰道が存在していた時代の地盤調査を行うことで、この地域での古代の環境を知ることができる（図 - 2）。日本海側の No.1, No.4 は、湖であった可能性が見られ、山側の No.2, No.3, No.5, No.8 は陸地であったと見られる。古代において、その場所が湖であったとすれば、そこを山陰道が通っていたとは考えにくい。そこで、No.1, No.4 の試料について実験を行なって湖であった特徴が見られるかを調べた。表 - 1 のように粘性土層の観察、土の活性度、均等係数及び珪藻化石分析などを行った。

珪藻は淡水から海水に至る殆ど全ての水域に生息しており、その大きさは 0.01mm から 0.1mm 程度と微小であるが、珪酸体の殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。地層中より得られた珪藻化石により古環境を復元する。分析の結果、No.4 の 1.9m の深さに写真 - 1 のような珪藻が確認できた。この珪藻は、*Diploneis subovalis*（ディプロネイス属）という種類で、底生性で、水草や石などに着生することから、これが含まれている層は、湖の底で堆積したものであると思われる。No.1 では、珪藻は確認できなかった。以上の結果から、古代において No.1 は河口、No.4 は、湖であったと考えてよいだろう。

5. まとめ

本研究では、史料から得られた駅の位置と、それらを結ぶルート用地形の直線性から推定し、古代山陰道の想定ルートをいくつか考え、それらの中から、どれがもっとも可能性が高いかを検討した。

古代山陰道の推定ルートは、駅や郡家の位置、古代の湖の存在から数通りに絞られる。

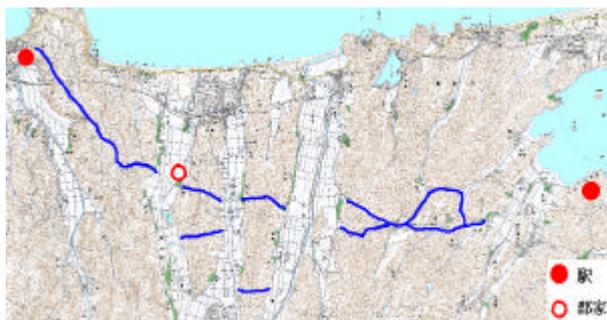


図 - 1 駅と郡家 直線性

表 - 1 地質分析

試料データ	均等係数	活性度	電気伝導度 (mS/cm)
No.1 0.8m	27.1	0.08	0.053
1.2m	8	0.3	0.045
1.4m	5.7	-	0.026
No.4 1.4m	7.1	3.03	0.091
1.9m	23.8	0.73	0.045
2.9m	5.8	4.72	0.026

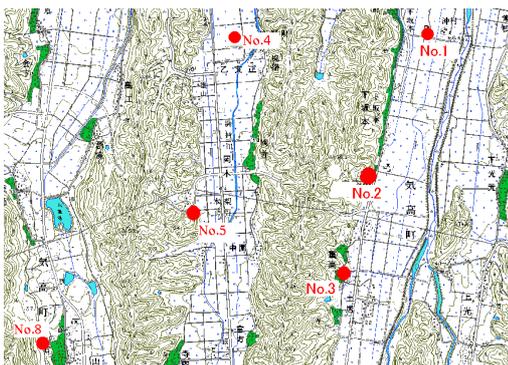


図 - 2 ボーリングの採取地点

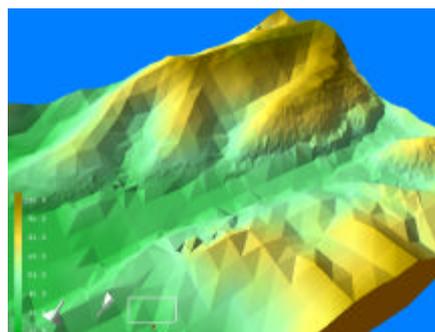


図 - 3 直線が見られる道

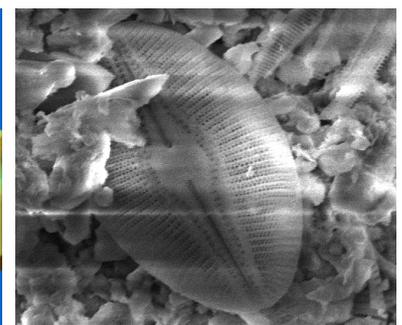


写真 - 1 珪藻化石

参考文献

- 1) 中林 保：『因幡・伯耆の町と街道』1997 P.164~176
- 2) 『珪藻の世界』 <http://www.u-gakugei.ac.jp/~mayama/diatoms/Diatom.htm>
- 3) 『淡水珪藻画像集』 <http://keisou.hoops.ne.jp/index.html>
- 4) 堆積環境が地盤特性に及ぼす影響に関するシンポジウム 発表論文集、土質工学会 1995 P.98